

京都哲學會發會四十周年記念記事

草 創 當 時

昔、サア・ウオルタア・ロオレエがロンドン塔に幽閉せられて、そこで世界史の第二巻を書いていたある日、塔の外で喧嘩をする者があつて、彼も窓からそれをとくと見た。翌日彼の友人で、やはりその喧嘩の始終を目撃した一人と、その光景を話し合つてみると、二人の見たとある事實が丸で違つていた。現にこの目で見たものさえ、眞實を誤るものだとしたら、遠く隔たる事件の眞實を知ることなどは、とても困難であらうと思つて、書いていた歴史の原稿を火に投げ入れて燃やしてしまったという話を、アナトオル・フランスが、「歴史の誤謬」の中で書いてゐる。(Les torts de l'histoire-La vie littéraire, II, p. 118—9)

この話も、どこまでサア・ウオルタアの傳記の眞實を傳えているものか、私は知らないが、古い思い出といふ

植 田 壽 藏

ものが、いかにはかなく事實を誤る怖れをもつかということに、私も近頃つくづくと氣がついた。私は永い間、「哲學研究」の創刊號の表題が、現在よりずっと低い位置にあつたと思つていた。第二號から今のうちに高い位置へ上がったものと思いつめていた。ところが最近になつて創刊號を取り出してみると、それが私の記憶とは丸で違つて高い、現在よりまだ一分ほども高い位置にあるのを見て、事の意外にびっくりした。この表題の位置が決められた時の状況を、私ははつきり覚えてゐるのである。その頃、今も半ばほど残つてゐる心理學實驗室に平行して、木造二階建ての研究室が、東は松原のすぐ前まで、西は心理の玄關が中央になるような長さで建つていた。その階上の中ほどにあつた哲學科の閱覽室で、東の壁に近く、南の窓へ寄つた卓子の上に——私の古い記憶では

――創刊號を置いて、諸教授と私どもとが五六人もいたか、その體裁を検討していた中で、表題の位置はこれで好いかとどなたかが云つた。もつと高い方がよくはないでしようか。その方がセレスティアルな感じがするようですがと私が云つた。そこに居られた松本教授が（印度哲學史、時の文科大學長）聲をあげて明るく笑われた。私は驚いて目を見張る思いがした。松本先生でも笑うことがあるのかとひそかに思い、不用意な一語が思いもかけぬ先生の笑いを得たことに、或る光榮に似た感じをもつた。これはしつかり覚えていて、まちがいようはないのであるが、しかし創刊號の體裁が記憶と違つていたことも、動かしようはないのである。これはよく考えてみると、その時卓上に置いてあつたのは、實は表紙の見本刷らしい。表紙の體裁が検討せられるのは當然の手續きである。當然それは、創刊以前にせられたはずである。まず見本刷が来て、それがこの日に検討せられた結果、創刊號の表題が、それとはずつと高い位置に印刷せられたものに相違ない。それを私が永い間まちがえていたのである。こういう例もある。これから述べる思い出に

も或は思わぬ誤りがないとも限らない。もしそのせつには、どうか諸君のお許しと御訂正とをお願いしたい。

大正五年二月二十七日の午後、京都大學、法科大學の大講堂で京都哲學會發會の公開講演會が開かれた。文科大學長松本文三郎博士の發會の辭につづいて、高田保馬氏「社會意識」教育學教授、小西重直博士「社會的教育學の過去及將來」松本博士「佛像の美術史的研究」の三講演があつた。聴衆四百餘人。同夜は學生集會所に晚餐會が開かれて、諸教授をはじめ、多くの若い人たちが出席して、この發會を記念した。

もちろん、それに先立つて、哲學科の諸教授が、慎重な考慮に基づいて、種々の準備を進められたものと思うが、その間のことは――少くとも私は――何も聞いていない。すつかり決つてからようやく知つたのであるが、そうして出來た京都哲學會の主意は、規則にあるように――廣義に於ける哲學、即ち、この哲學科に屬するすべての學問――の、「研究及其普及」ということにあつた。その方法として、毎月一回研究會を開き、春秋二回、公開講演會

を開催する。毎月一回雑誌「哲學研究」を発行する。會員は會費を納めて、これらの會合に出席することができる。「哲學研究」の配付をうける。會員は個人に限らず、學校、圖書館、教育會などの團體の名をもつても入會することができるといふことも、この會の一つの新しい方法として試みられた。

方法の一つとして、學術雑誌が発行せられたのであるが、結果から見ると、これがこの京都哲學會の中心的な事業になつてゐる。おそらくこれに最も大きい關心をかけて、この會も創立せられたのではなかつたかと思う。

文科大學には、それ以前から學術雑誌「藝文」が発行せられていた。明治四十三年四月の創刊で、すでに七卷を重ねていたが、そこに哲學科の諸研究を收録するには――史學科なども同様に――次第に場所の狹隘が感ぜられていた。年を追うて數を加える新進の學徒たちが、自由に研究を發表することのできる場所を作つてやろうという諸教授の親心が、「哲學研究」の出來たそもその理由であつた。それを私は朝永教授から親しく聞いた。雑誌の發行が東京の大葉久吉氏の經營する寶文館に託されたこ

とには、特に朝永博士の盡力があつたもののように思う。博士はすでにそれ以前に、この書店から、「哲學辭典」の六版、「哲學綱要」などの勞作を出版せられていた。「近世に於ける「我」の自覺史」や、「獨逸思想と其背景」なども、それにつづいてこれから出版せられたのである。

雑誌の發行が決ると、種々の點について若い人たちの意見が求められた。雑誌の名は何とするか。これには「哲學」といふのも、一つの考案として現れたが、すでに同じ名の季刊雑誌が何かがあつた。「哲學評論」という聲もあつた。しかし結局「哲學研究」が穩健でよからうと云われて、これに落ちついた。委員や執筆者の名に肩書をつけるかどうかといふようなことにも意見が對立して、簡單には決らなかつた。つけて置いたら好いじやないか。こけおどしにでもなるだろうと誰かが云う。こけなんかおどさなくなつて好いと云う。いやこけはおどすべきものだと云う。このやりとりを、はじめからだまつて聞いていた野崎廣義君が、この時急に笑い出した。この人のことで、そこにも何か彼の興味をひくような意味

を見つけたものか。

第一號はその年の四月一日に出た。西田博士の「現代の哲學」をはじめ、松本、小西兩博士のさきの講演とその他の論文がのつた。原則として、論説、雜錄、學界近況、彙報、新著紹介などを、一二―二八頁に収める豫定であつた。編輯は私がそれまでの「藝文」から移り、中川、即ち山内得立、深田武（心理學）兩君の協力を仰いだが、まもなく―時間を節約するために―私一人が引きうけることになつた。

雜誌は―私のおぼろな記憶に誤りがなければ―種々の新聞、雜誌の好意的な紹介を得たと思う。東京の「萬朝報」もその一つであつたが、ただこの新聞の紹介には、末のところに、何でも水の出ばなというものはというような意味の言葉があつた。最初の好調を永續しなければだめだという戒めであろう。私にはこの言葉がいつまでも残つて、折にふれては思い出した。

研究室の西の階段を上がつた廊下の左側、即ち西の端に教授室が二部屋並んでいた。その南側のが西田先生の部屋であつたが、それを哲學會の事務室、編輯室に借り

ることになつた。事務には寶嚴方治（とみよし・みちはる）

君が來た。もとは佐賀縣の中學校で數學を教えた人で、高田保馬君もこの人に習つた。京都へ來てから二十年近くも、朝永先生の好意をうけて過した―と自分で私に話した―が、會の仕事が始まると同時に、先生の紹介で書記になつた。六尺近い長身の兩肩を張り、禿頭に壯嚴な八字髭を伸ばして、お祖父さん以來のものという久留米がすりに、小倉の袴を裾短かにはき、悠々と闊歩する光景は偉觀であつた。朝永先生の言葉のごとく「むく犬のごとく忠實な」人であつたが、それだけにまた異色も濃くて、しばしば人を苦笑させた。このような個性の著しい人に、多年にわたる好意をつづけられたことを見るだけでも、朝永先生の家庭が、中にも夫人の世にもめずらしくすぐれたお人柄の一端がうかがわれた。

勤勉で仕事に忠實である上に、性格によるのであろう、學者に對する深い尊敬をもつていて、諸教授に傾倒し、この事務室に集まる諸君を歓迎した。諸君も彼に、笑いを伴う好意をもつて、好んでここに出入した。

雜誌は月を追うて順調に出ていつた。編輯にもあまり苦勞はしなかつた。諸教授その他の教官諸氏も、つぎつぎに研究の一端を發表せられた。西田先生の「自覺における直觀と反省」も、十月の第七號からのりはじめた。

これは大正二年の九月からこの年の三月まで、「藝文」に連載せられたのであるが、「これは單に余の考えを練るために書きつつある余の思索日記と見られんことを望む」という言葉を含む小序をもつて「哲學研究」に繼續せられ、翌年の五月に完結した。私の周圍にいた同學の諸君も、好意にみちて援助してくれた。高田保馬君のさきの講演が、「社會意識の成立」と題して第二號に掲載せられた。それを最初の討論の對象にしたと思うから、京都哲學會の發足とはば同じ頃に、當時哲學科の研究室にいた副手諸君や、市内の大學で講義をしていた諸君などが集まつて、自由に討論などをする學會を作つた。「月曜會」と名を付けて、毎月一度ぐらい、心理學教室、學生集會所の一室などに集まつた。心理學の千葉胤成、社會學の高田保馬、宗教學の赤松智城、宇野圓空、哲學の安部晴之助、山内得立、久松眞一、印度哲學の本田義英、

私。まだ三人いたのだが、誰であつたかはつきりしない。おもに會員の誰かが哲學研究へ書いた論文を一つ取り上げて、それをお互に、先輩であろうと何であろうと容赦なく、無遠慮きわまる批評を加えて憚らず、加えられる者も一きようは人の上、あすは身の上とばかり一昂然として闘つた。今でもこの會の思い出は楽しい。これらの諸君と、それに連なる若い諸君が、筆を揃えて書いてくれた。「哲學研究」は、はじめから、新刊紹介、むしろ批評に力を注ぐことを、方針の一つに敷えていた。欄の名も「新著批評」にしようかという意見もあつたが、まあ紹介として置こう、それで批評はいくらでもできるということで「紹介」にした。これは朝永博士の言葉であつたように思う。事實は多く批評であつた。一々終りに署名して責任を明らかにした。一例を見ると、朝永博士の「近世に於ける「我」の自覺史」を、中川得立君が紹介した。「著者の根柢に横たわる批判的理想を見ることは、吾々の大なる喜びである」「我」の自覺史は同時に「吾」の自覺史ではないであらうか。……近代思想を過去五十年の短日月に縮刷して繰返した觀のある吾が

明治思想史は私の自覚史によつて教えられる所多からざるを得ないであろう」というような調子である。これがその二年ほど前にようやく卒業した一人が、恩師の勞作を語る言葉であつた。きびしい批評もたびたび出た。批評に對する著者の答えが寄せられたのを掲載して、またその批評を書いた人もある。本田義英君。有名な禪の書物の註釋書を久松眞一君が紹介した中には、こういう本はこの人のような賢い人が取り上げるものではないというような意味の言葉もあつた。

原稿には困らなかつたが、約束の期限どおりに得られないことにはしばしば困つた。原稿を東京へ送つて校正を一々ここへ取る。それを著者へ届けてまた取りに行く。一度東京への返送をまかしたら、四日間忘れて置かれて驚いてしまつた。こういう往復の時間を考えなければならぬのに、思わしく豫定の日に受け取れない。メ切を早めたらよかろうとも思われるが、種々の事情でそれが簡單にはいかなかつた。決して後らさない人が二人あつた。松本、西田兩教授である。必ず期限の二三日前に、わざわざ學校へ届けられた。こういうのは例外で、

なかなかそうはいかないらしい。しかし受取つた原稿を見ると尤もだとも、氣の毒だとも思つた。朝永博士の原稿には、よく稿のように別の筆蹟がまじり、それにまた博士の訂正が加つていた。いつか先生が笑いながら、藤井には注意したまへと云われた。藤井(健)教授が、かつてメ切に後れながら、原稿を送つたと電報をうち、實はまだ書いていたことがあるからという話であつた。藤井博士には随分迷惑をかけた。メ切ぎりぎりの朝うけとりに行くと、室町今出川下ル町の、階上四帖半の書齋で卓子の傍で待たされる。寒い朝早くから、ようやく出来た原稿を讀んでは筆を入れられる。よくこんなことができるものだと思ひながら、いつまでも靜かにしもしくは冷酷に――待つていた。私などには、人がそばにいたりすると、原稿を書くどころか、讀むこともできない。

いくら手揃いでも、急に違約せられて狼狽することもある。しかしまた方法もある。そういうことになつた或る日、私はあわてて、今歸られたという米田博士のあとを追うた。構内の道で追いつくなり、先生、原稿をお願ひしますと云つた。いつまでやいな。あと三日しかない

のですが。哲學研究の原稿やないか。そうです。三日やそこらで書けるかいな。ほかのかたには書けません、先生には書けます、お願いします。それでまだ何か云われたが、結局一兩日延ばして、堂々たる論文を書かれた。二三回もつづいたかと思う。

すでに七年たつているが、哲學研究四百號の別冊として、多大の勞を費して編纂せられた、一卷から三十四卷までの總目次の一頁から長い坂道を下りてくる思いで——私は読んでみた。はじめの頃の論文の題と著者の名には、さまざまの思い出がよみがえる。私が去つたすぐあとは務臺君。つづいて高坂君。中井、服部、澤瀉、小田、三村諸君を経て、現委員酒井君へ。おそらく言葉には云い盡しがたい諸君の努力によつて、數えることも困難なほどの多くの學者たちの勞苦にみちた研究が、廣義に於ける哲學」の世界の、それぞれの廣い領域のさまざまな方向を指す問題に——全く地下の鐵脈が次第に廣く深く掘り進められて行くように——答えを與えている。はじめての名が見える。卷を追うてそれがしばしば現れてく

る。彼が次第に學的成長を加へ、その研究が次第に廣く深さを加えてきたのである。實に人智の驚くべき、壯麗をきわめた體系が、この總目次に包まれている。京都大學哲學科が、過去四十年に達成した偉大なる學的功業の、最も明確な證據である。

四十年間、私も「哲學研究」を發行の月々に受取つてきた。そのたびに——或る特別の事情に妨げられないかぎり——必ず目次を一覽し、その或るものを一讀し、もしくは反覆して熟讀した。西田先生の「場所」を、大正十五年十月二十五日の夜、ハイデルベルヒの旅館の一室で、餓え渇くように讀み耽つたのも遠い思い出である。しかしまた或るものは——實にその多くのものは——論文の題と著者とを一見したままで過ぎてしまつた。今これを讀みかえすと、その見過した多くの論文のうちには、現に私の關心を強く引いている問題と或る關聯をもつ研究が、さまざまの立場から、さまざまの答えを與えていることに氣がついて、私は殆ど狼狽に似た思いを伴う悔恨を感じたのである。これを今から讀んでみるような時が、私に残されているであらうか。

これらの研究のどれ一つでも輕卒には見過されないとを私は祈る。野に叫ぶ聲のごとく空しく消えてしまわないことを切に祈る。どれ一つでも、廣野の中の一塊の土のように、取り除くことのできない意味をもつことが――それぞれの世界の中でそれらのものの含むべき位置と、それに固有の充實をもつことが――正確に認識せられねばならない。云いかえると、四十年にわたつて「哲學

研究」の形成した歴史における、それらの研究の意味が明白に諒解せられねばならない。

四十周年を迎えた京都哲學會は、遠からず五十周年を迎えるであろう。「哲學研究」の四百號が記念せられたように、五百號もまた記念せられるであろう。それにふさわしい行事も少なくはないであろう。

(筆者 京都大學名譽教授〔文學部、美學〕)

前 號 目 次

惡の問題と心身關係……………島 芳 夫

カント教育學の解釋とその問題…門 脇 卓 爾

リチュルの價值判斷……………森 田 雄 三 郎
の 問 題 性 (完)

クリスチャン・ヴォルフに
於ける哲學用語について……………細 川 董

——ヴォルフ研究其の一——
新着外國雜誌所載論文一覽